

2019 INTERNATIONAL ROCK CLIMBING FESTIVAL  
1<sup>st</sup> ASIAN ROCK CLIMBING CHAMPIONSHIP

参加報告

- ・参加者 石川貴大(29歳)
- ・所属クラブ 静岡エクスペディションクラブ、浜松勤労者山岳会
- ・期間 8月28日～9月5日(移動日含む)
- ・開催地 Tuyuk Su area (トゥユク・ス)

**所感**

今回私は、カザフスタンで開催されたインターナショナルロッククライミングフェスティバルに参加した。今回も日本からは1名での参加である。昨年、ヨセミテのICMに参加したことで、私の中で海外クライミングは以前よりも身近なものになり、海外の岩場のような未体験な場所に積極的に踏み込むことの面白さをより感じるようになっていた。今回も自分にとっての新たな挑戦としてこのフェスティバルへ参加を決めた。

私は特別優れたクライマーではない。クライミングのレベルで言えば、丁度真ん中くらいの普通のクライマーだ。だが、私のような普通のクライマーが海外に目を向けていくことは今後の日本の登山界にとっても重要ではないかを感じる。海外というだけで嫌煙してしまう人も多いが、実際に経験をしてみることでその面白さや素晴らしさを感じ取れると思う。「行ってみなければ分からないこと」は本当にたくさんあるのだと、私はこれまでに参加させてもらった海外クライミングイベントで実感している。私が経験したことをより多くの人に知ってもらい、クライミングレベルに関わらず、海外に目を向けるきっかけになって欲しいと感じる。特に、もっと若い世代の人達にはどんどん外にでて行ってほしいと思う。私も、まだ2つの海外クライミングイベントにしか参加していないが、私の経験が次に行く人たちのヒントになればと思っている。

今回、カザフスタン山岳連盟のカズベックさんと話をした際、このイベントに来た日本人は私が初めてなので、ここでの経験を是非日本の皆に発信してほしいと言われた。今後の展望として、カザフスタンと日本の交流の為、多くの日本人クライマーに訪れてほしいそうだ。このイベントに参加して各国の人たちと交流を深め、現地の人とパートナーを組んでクライミングを行えたことは、私にとって本当にプラスの経験になった。また、今回の会場となったトゥユク・スのクライミング環境は立地や岩の規模、気候条件等、素晴らしいものだった。このことは、日本の多くのクライマーに知ってもらいたいと思う。だから、私は来年以降多くの日本人クライマーに、このカザフスタンでのイベントに参加してもらいたいと感じている。

今までは、地元山岳会やクラブへの発信にとどまっていたが、今後は情報発信できる場をもっと広げていきたいと思う。一般のクライマーであっても海外に出て多くの経験を積むということを伝えていきたい。

## 8月28日～29日 移動および散策

開催地のアルマトイへはインチョン経由で行った。アルマトイに到着すると空港に車で迎えに来てくれていた。当日は、クライミング会場となるトゥクク・スまで移動する予定だったが、深夜の為一旦カザフスタン山岳連盟の事務所で仮眠を取った。朝になると、カザフスタン山岳連盟のカズベックさんが来て下さり、今回のフェスティバルの概要や今後の展望を聞かせてくれた。しばらくしてモンゴルから来た2名と合流しトゥクク・スへと向かった。トゥクク・スは、空港から約1時間で、市街地からほど近い山間にある。岩場の立地としてはとても良い。参加者はそこにあるロッジに宿泊する。到着すると、私のクライミングパートナーをしてくれた Kirill が出迎えてくれた。時間があったので、翌日から私たちが登る岩場を案内してくれた。岩場へは、ロッジから徒歩30分だ。アプローチも非常にいい岩場である。岩場に着くと、200mを越える見事な壁が目の前にそそり立っていた。これがカザフスタンのグレンデかと思うとなかなかの存在感だった。明日は、この岩を登るのかと期待に胸が膨らんだ。その後、近場にあったボルダーを少し楽しみ、翌日からのクライミングに備えた。

## 8月30日 オープニングセレモニー&トレーニング

この日は、オープニングセレモニーが実施された。実はこの時まで知らなかったのだが、今回はフェスティバルと合わせて、1st Asian Rock Climbing Championship も開催されることになっていた。その時は、何か選手権も一緒にやるんだくらいにしか思っていなかった。しかし、セレモニーで選手権出場者の紹介が始まると、なんと私の名前も呼ばれたのだ。「え？」と驚いてしまった。知らぬ間にアジア選手権出るようになっていたのだ。そして、日本国旗が掲げられている意味を理解した。本当に驚いたが、始まってしまったものは仕方ないと、そのまま選手権に参加することにした。とはいえ、私は日本でもコンペは、ほとんど参加したことが無くパートナーの Kirill とどれだけチームワークを発揮できるかも分からなかった。だから、ただただ不安であった。この日は、選手権で使うエリアを自由に登ることができた。その為、Kirill と一緒に手ごろな 6b+(7ピッチ)のルートに登ることになった。トゥクク・スの岩場は花崗岩のフェイスクライミングでボルト主体のルートだ。岩はところどころルーズなものが多い。6b+とはいえ、意外と繊細な動きが求められた。ここ2ヶ月リバーガイドの仕事が忙しく外の岩に登るのは久しぶりだったが、とても気持ちの良いクライミングができた。



## 8月31日 トレーニング

朝起床すると、お腹の調子が悪かった。時差ぼけか食べ物が原因だと思う。その為、この日は、優しいグレードを登りたかったのだが、Kirill が昨日の私の登りを見て、7a (7ピッチ) のルートをお勧めしてきた。折角なので登ってみることにしたが、アプローチですでに体が重く胃が痛んだ。ただ、すぐに懸垂で降りれるルートだったので、とりあえず取付いた。奇数ピッチをリードさせてもらった。登り始めると、体調のことは忘れてクライミングに集中していた。6c までは特に問題なく登れたが 7a のピッチはテンションが入ってしまった。最終ピッチでパワフルなボルダームーブを求められた。トレーニングのはずが、結構本気になってしまった。「これはトレーニングなのか？」と Kirill に尋ねると、とても楽しそうに「yes!!」とニコニコしていた。彼はかなり強いクライマーらしく余裕だったようだ。この日は、つるべで登りきり Kirill ともうまく呼吸が合うようになった。夕食後、まだお腹の調子が良くなかったので、すぐに寝ようとシュラフに入った。しかし、「もう寝るのか？」と同室のイラン人に起こされ、食後の紅茶とお菓子を勧められた。お腹の調子が悪いから少しでいいと言ったのだが、もっと食べた方がいいと大量のナッツと果実をくれた。完全に彼らの勢いに負けてしまった。きっと 1 人で来ていた私を気にかけてくれたのだろう。だが、腹痛にナッツはやはりだめだった…とはいえ、彼らと互いの国のクライミングについて話す時間はとても楽しかった。グランドジョラスやトランゴタワーなど私の憧れの岩場を登ってきている人たちで、聞いていてとても刺激になった。ただ、彼らに日本においてよと言うと、ビザが下りないと言われた。国と国の関係の影響で行きたい場所に行けないというのはなんだかもどかしい気持ちになった。いつか、彼らを日本に招待できたらと思う。

## 9月1日 Asian Rock Climbing Championship 1 日目

いよいよ、アジア選手権がスタート。しかし、前日ナッツにとどめを刺されたお腹は絶不調だった。この日は、クライミングマラソンというものが実施された。制限時間内にどれだけ登れるかというもので、各チームがスタートするルートはくじ引きで決まる。1 ルートにつき 3 時間の制限時間があり、それを越えた場合は終了となる。次のルート(任意)に行くためには 3 時間以内にトップアウトして次のルートに取付く必要がある。また、15 時までに取り付いたルートが最終となる。今回は男男チームと男女チームでクラスを分けて行われた。私は、Kirill と組んでいたのが男男チームのクラスとなる。私たちは、7a+(7ピッチ)からスタートとなった。7a+は私のマルチピッチの RP グレードよりも上である。なので、比較的優しいピッチになる奇数ピッチを私が担当した。今回は何よりチームのスピードが重要となる。1 ルート目は 2 時間 45 分で抜けることができた。2 ルート目は 7a+(6ピッチ)のルートだ。ここでは、ラスト 2 ピッチが核心ピッチとなる。そのうちの 1 ピッチをリードさせてもらった。だが、被った傾斜が意外ときつくテンションしながら抜ける形となった。最終ピッチを抜けるとコントロールタイムを 7 分オーバーしており、記録としては、5 ピッチ目までとなった。残念ではあったが、奮闘的なクライミングができたので満足感はあった。Kirill とここまで一緒に登ってきて、2 人で達成感を共有することができたようにも思う。

参加 4 チームのうちこの日の成績は 3 位であった。マラソンが終わると、お腹は元気になっていたが、ここまで通算マルチ 4 本(27 ピッチ)を登っていたこともあり、疲れがでてすぐに就寝した。もちろん、イラン人からの紅茶とお菓子のおもてなしを受けてから。



### 9月2日 Asian Rock Climbing Championship 2 日目

アジア選手権 2 日目はファイナルとなる。ファイナルは、用意されたルートの中で最も難しい 7c+(7 ピッチ)を各チームがトライする。4 ピッチ目までを 3 時間で抜ける必要がある。正直 7a+でいっぱいいっぱいの私にとっては、7c+はかなり厳しかった。無理は承知であったが、最後なので出だしの 7a のピッチからリードさせてもらった。案の定時間が掛かってしまい、3ピッチを登り切ったところでタイムオーバーとなった。このルートは、前傾壁に加えかなり岩がルーズでアルパイン的な要素も求められた。自分にとっては、とても難しいルートだったが、最後に触ることができて良かったと思う。次回はさらに上に見えていた 7c+のオーバーハングに挑戦できるよう頑張りたいと感じた。この日も順位は変わらず 3 位であった。岩場から戻るとスタッフが昼食を用意して待っていてくれた。色々終わってほっとしたのか、急にお腹が空いてたくさん食べることができた。その後、地元 TV 局のインタビューにも答えた。簡単な質問だったが片言の英語になってしまいちょっと恥ずかしかった。選手権が終わると、夕食会場で打ち上げが行われた。少しばかりウォッカを頂いたのだが、中々強烈だった。すすただけで食道が焼けるようだった。この頃には、各国のメンバーとも打ち解けて楽しい時間を過ごすことができた。



### 9月3日クローキングセレモニー

この日はクローキングセレモニーだったが、式典は14時からだったので、イランメンバーと最後にクライミングに出かけた。私はヨレヨレだったので、カメラマンとして同行した。イベント中ずっとイランメンバーが私のことを構ってくれていたのが、今日で最後と思うとなんだか寂しい気持ちになった。短い時間だったが最後のクライミングと一緒に楽しんだ。クローキングセレモニーでは、3位ということで銅メダルをもらうことができた。4組中なので、すごいことではないのだが日本から離れたこの場所で表彰してもらえたことは純粋に嬉しかった。今回も相変わらず片言の英会話しかできなかったが、良い仲間に出会えて、良いクライミングができて本当に素晴らしい時間を過ごすことができたと思う。ここでもらった銅メダルは私にとって、とても良い記念になった。



### 9月4日～5日帰国

11時にロッジを後にし、空港へと向かった。帰りも行きと同様インチョンを経由して日本へ帰国した。予想よりもハードで怒涛の9日間となったが、また一つ良い経験を積むことができた。

#### 【使用装備】

- ・ダブルロープ 50m×2本
- ・クイックドロー10本
- ・カム1セット
- ・ナッツ1セット
- ・アルパインドロー5セット
- ・個人登攀装備一式(ハーネス、シューズ、スリング、カラビナ等)

#### 【費用】

- ・参加費 260ドル(宿泊費、送迎費、1日3食の食費を含む)
- ・航空券 9万円
- ・お土産、行動食等 5千円